

「故郷と共に生きる」

鹿児島県 阿久根市立大川中学校 2年 ^{おおた} ^{なごみ} 大田 和

雄大な東シナ海に沈む夕日は、キラキラと輝き、今日も私たちの町を赤く染めています。夏が近づくと、川にはホタルが舞い、山は青々と茂り緑が鮮やかです。人々の心を和ませる風景が広がるここは、私の故郷大川です。私は、ここ大川で生まれ育ちました。私の両親、祖父母、先祖代々、この地に生きています。この美しい故郷大川に、信じられない光景が広がった42年前。北薩地方を中心に甚大な被害が出た集中豪雨があったのです。

昭和46年7月23日。その日の雨は今まで経験したことのない土砂降り、家のかわらがはずれているわけではないのに、雨漏りするほど、ひどかったそうです。阿久根市では、23日午後5時から6時の1時間に106ミリという、当時の県本土最大の降雨量を記録しました。この激しい雨で、大川の尻無集落の山の土砂が一気に崩れ、家が壊され、流されました。当時の写真を見ると、あまりの悲惨な光景に思わず息をのみます。

「お父さんの同級生も、家が流されて亡くなった。かわいそうで悲しかったよ。その子は優しい子だった。忘れられないよ。」

父の言葉を聞いて、私は絶句しました。まさかの父の同級生が亡くなっていたなんて。その一家は6人が生き埋めになり、2人亡くなったとのこと。父は当時10歳、小学校4年生です。亡くなった父の同級生も同じ年。この世に生まれてわずか10年しか生きられなかったなんて。土砂にのみこまれて、苦しかっただろう。私は胸が押しつぶされそうになりました。

悪夢のような時が過ぎ、雨が少しやんでから、父と母、祖母は、尻無川を見に行ったそうです。そのときの川の様子は、日頃見ていたキラキラと水面が光る、美しいせせらぎの川と全く違いました。雨がやんでいても、茶色に濁り、ゴウゴウとすさまじい勢いで流れていました。道路は水があふれ、水浸し。堤防は壊れ、行方不明の方を探している姿もあったようです。42年前の、たった1日の出来事でした。

さて、阿久根市で、現在「防災マップ」が各家庭に配付されています。この42年前の話聞いて、その「防災マップ」をもう一度開いてみました。私は、背筋が凍るような思いにかられました。それは、私の住んでいる尻無集落が、土石流発生危険渓流があり、土砂災害特別区域、いわゆる「レッドゾーン」になっているからです。私が毎日生活しているところが、危険な場所であった……。不安と怖さでいっぱいになりました。あれから42年間、大きな災害もなかったことが幸せであったと思うと同時に、土砂災害が起こらないよう、集中豪雨が降らないよう願うばかりです。

しかし、願うだけでいいのでしょうか。現在の地球の気象状況では、いつ集中豪雨が発生するか予測はできません。私は、災害が起こったときに、どのような行動をとればいいのか、42年前に悲しみを体験した祖母と父と母と一緒に一生懸命考えました。そこで確認したのは次のようなことです。日頃から危険な箇所を確認すること、避難場所を確認すること、「自分たちは大丈夫」という思いを決してもたないこと。そして、近所の方々や地域の方々と日頃からいつも支え合って生きていくことです。日頃から付き合いがなければ、いざという時に、本当に助け合って生きていくことができないと思います。

42年前の集中豪雨。自然豊かな故郷大川の自然。また、牙をむいて、人の命を奪ってしまう自然。どちらも同じ自然です。私にとって大好きな大川の自然に対して畏敬の念をもち、地域の人々と支え合って生きていくこと。「故郷と共に生きる」ことの大切さを私は今、しみじみと感じています。